

# 同生同名御書

文永九年四月

五一歳

大闇おおやみをば日輪やぶる。女人の心は大闇のごとし、法華経は日輪のごとし。幼子おさなごは母をしらず、母は幼子をわすれず。釈迦仏は母のごとし、女人は幼子のごとし。二人たがひに思へばすべてはなれず。一人は思へども、一人思はざればあるときはあひ、あるときはあわず。仏はを思もふものゝごとし、女人はを思もはざるものゝごとし。我等仏をおもはゞいかでか釈迦仏見え給はざるべき。石を珠といへども珠とならず、珠を石といへども石とならず。権経の当世の念仏等は石のごとし。念仏は法華経ぞと申すとも法華経等にあらず。又法華経をそしるとも、珠の石とならざるがごとし。

昔、唐国もろこしに徽宗皇帝きそうと申せし悪王あり。道士と申すものにすかされて、仏像経巻をうしなひ、僧尼そうにを皆還俗せしめしに、一人として還俗せざるものなかりき。其の中に法道三蔵と申せし人こそ、勅宣おもてをおそれずして面おもてにかなやきをやかれて、江南こうなんと申せし処へ流されて候ひしが、今の世の禅宗と申す道士の法門のような悪法を御信用ある世に生まれて、日蓮が大難に値ふことは法道に似たり。

おのおのわずかの御身と生まれて、鎌倉にみながら人目をもはゞからず、命をもおしまず、法華経を御信用ある事、たゞ事ともおぼえず。但おしはかるに、濁れる水にごに玉を入れぬれば水の清すむがごとし。しらざる事をよき人におしえられて、其のまゝに信用せば道理にきこゆるがごとし。釈迦仏・普賢菩薩ふげん・薬王菩薩しやくおうけ・宿王華菩薩等の各々の御心中こころに入り給へるか。法華経の文に閻浮提えんぶだいに此の経を信ぜん人は普賢菩薩の力なりと申す是なるべし。

女人はたとへば藤のごとし、をところは松のごとし。須臾しゅゆもはなれぬれば立ちあがる事なし。然るにはかばかしき下人もなきに、かゝる乱れたる世に此のとのをつかはされたる心ざし、大地よりもあつし、地神定んでしりぬらん。虚空よりもたかし、梵天帝釈もしらせ給ひぬらん。

人の身には同生同名と申す二ふたりのつかひを、天生まるゝ時よりつけさせ給ひて、影の身にしたがふがごとく須臾しゅゆもはなれず、大罪・小罪・大功德・小功德すこしもおとさず、遥々はるばる天に上のぼて申し候と仏説き給ふ。

此の事は、はや天もしろしめしぬらん。たのもし、たのもし。

日 蓮 花 押

此の御文は藤四郎殿の女房と、常によりあひて御覧あるべく候。